

大学中途退学者のアイデンティティ形成に 関する研究

森 田 裕 司

〈問題と目的〉

現在の我が国の進学率の上昇はめざましく、1994年度には高校生の43%が大学に進学している。その結果、大学の大衆化が進み、キャンパスにはさまざまな能力や適性、興味、価値観をもった多様な学生が存在するようになってきている。かつて、大学とは一部の者が進む道であり、その多くは専門に対する関心や明確な目的意識をもって進学を選択していたといえるだろう。しかし、そのような大学に対する目的意識も変化してきている。

そのような中であって、いったん大学に入学しながら、中途退学（以下、中退とする）していく学生も少なくないのが現状である。中退の理由はさまざまであろうが、従来はどちらかといえば、不本意ながらやむをえず退学せざるをえなかったという場合が多かったのではないかと推測される。そのため、中退は否定的な意味にとられがちであった。しかし、近年ではアイデンティティ形成のために主体的に退学を選び取る者などもあるであろうと予想される。最近になって、そうした中退の肯定的な側面が次第に指摘されるようになってきている（Hirsch & Keniston 1970, Timmons 1978, Stuhr, 1987）。しかしながら、現状では、退学時にその動機を詳しく知ることは困難であることが多く、また、その後の追跡調査を行った研究も、少なくとも我が国ではほとんど行われていない。中退の理由にはど

のようなものがあり、そこにはどのような葛藤や心理的危機があるのだろうか。そして、その後彼らはどういう経過をたどり、どのような形でアイデンティティを形成しているのであろうか。こうした視点に立った中退者の研究は、青年期のさまざまなアイデンティティの形成過程を明らかにするために必要な領域であろうと考えられる。

そこで本研究では、経済学の単科大学を中退した学生を対象に、彼らがその後どのような生活を送っているのかを調べ、社会的適応や心理的適応の状態を明らかにし、また、彼らのアイデンティティ形成の過程や要因について検討することを目的とした。研究Ⅰでは、質問紙による調査を実施し、中退者の一般的な実態をとらえようとした。研究Ⅱでは、個別面接による調査を実施し、事例を通して中退者の詳細なプロセスの検討を行った。

研究Ⅰ 質問紙調査

〈方 法〉

対象：広島経済大学を1988年4月から1994年3月までに中退した者449名を対象とした。

手続き：質問紙調査用紙を郵送した。質問紙の質問項目は以下のとおりであった。

質問項目

- (1) 現在の様子：職業（現在までの経過）、生活形態、現在の仕事（または学校）の満足感、生活費のまかない方、趣味や打ち込むものの有無と内容、免許や資格の有無と内容
- (2) 入退学について：入学の理由、中退の理由
- (3) 将来の展望

〈結果と考察〉

依頼した449名のうち、質問紙への回答が得られたのは44名であった。

回答率は9.8%であった。退学した学生が自分が去った大学をどのように感じているかはさまざまであろう。中には、ネガティブなイメージをもっていたり、時間が経って関心がなくなってしまう者も少なくないと推測される。こうした対象者の心理に加え、調査依頼に協力するための心理的、物理的負担などを考慮すると、本調査の回答率は必ずしも低いとはいえず、むしろ予想よりも多くの回答が得られたと感じている。

回答者44名のうち、性別の内訳は男性が42名、女性が2名であった。退学年度別内訳、退学時の学年の内訳は表1、表2のとおりであった。また、質問項目ごとの回答の結果を図1～図9に示した。

(1) 現在の様子

(a) 現在の職業

現在の職業(図1)は、仕事をしている者は、全体のおよそ3分の2にあたる29名であった。そのうち28名が常勤の仕事に就いていた。大学生は約2割にあたる8名、無職は約1割の4名、その他が3名であった。この結果から、ほとんどの者は学生を含めて何らかの社会的役割を得て活動していることがわかった。したがって、社会的な適応という面では、回答者のほとんどが適応している状態にあるといえるであろう。仕事に就いてい

表1 回答者の退学年度別内訳

退学年度	人数
1988	14
1989	4
1990	6
1991	8
1992	5
1993	5
不明	2
計	44

表2 回答者の退学時の学年の内訳

学年	人数
1年	18
2年	9
3年	8
4年	8
不明	1
計	44

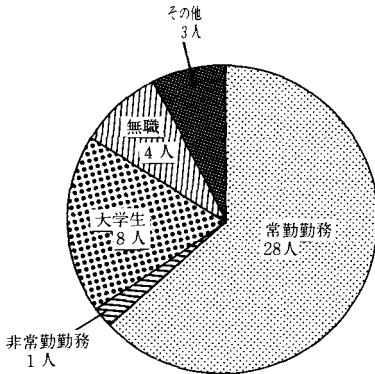


図1 現在の職業

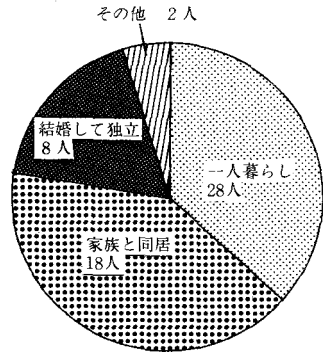


図2 現在の生活形態

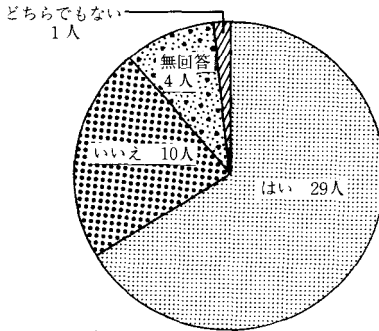


図3 現在の仕事や学校に満足しているか

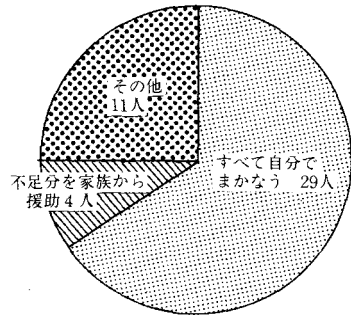


図4 生活費のまかない方

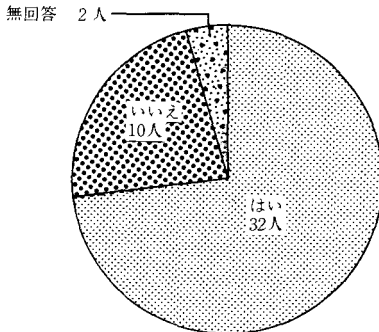


図5 趣味や打ち込むものがあるか

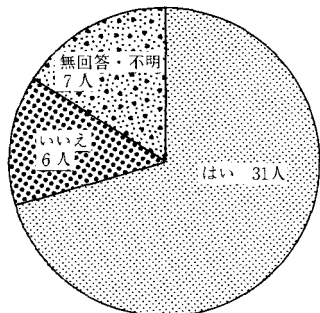


図6 免許や資格はあるか

る者の仕事内容は、会社員（製造、販売、貿易、出版など）、公務員、教員、看護婦、マッサージ師、自営業（大工、理容業、ゲームセンターなど）など、多岐にわたっていた。なお、現在常勤の仕事に就いている28名のうち、退学後直ちに就職した者は15名、他校に進学後就職した者は10名、アルバイトを経て就職した者は3名であった。大学生の専攻は、経済学、社会学、社会福祉、基礎科学、機械工学などであった。また、無職の者は4名のうち2名は病気のため療養中であった。

(b) 現在の生活形態

現在の生活形態（図2）は、一人暮らしが4割弱、家族と同居が約4割、結婚して独立している者が約2割であった。

(c) 現在の仕事（または学校）の満足感

現在の仕事や学校の満足感（図3）は、およそ3分の2にあたる29名が「満足している」と回答しており、かなり多くの者が満足感を感じていた。すなわち、(a)の社会的な適応面だけでなく、心理的な面においても適応している者が多いということがわかった。一方、「満足していない」と回答した者は約2割であった。これに無回答や「どちらでもない」を含めると、3分の1の者が何らかの不適応感を感じていることが推測された。

(d) 生活費のまかない方

生活費（図4）は、全体のおよそ3分の2の者が、「すべて自分でまかなう」と回答しており、経済的に自立していることがわかった。また、仕事に就いている者は、ほとんど（29名のうち27名）が自立していることもわかった。経済的な自立が社会的自立の条件であると考えれば、多くの者は社会的に自立しているといえるだろう。一方、全体のおよそ3分の1の者は、不足分あるいは全額を家族から援助してもらっていた。彼らはほとんどが学生や無職の者であった。

(e) 趣味や打ち込むもの

趣味や打ち込むもの（図5）については、7割以上にあたる32名が「もっている」と回答していた。趣味や打ち込むものというのは、気持ちをり

フレッシュしたり、心のゆとりや活力を得ることができるという意味で、心理的適応にとって非常に大切なものである。この結果から、多くの者が生活を積極的に楽しんでいる様子が伺われた。その内容は、スポーツ、ドライブ、ツーリング、バンド演奏、読書、釣り、カラオケ、旅行、パソコン、仕事、資格の勉強、ボランティアなどで、非常に多岐にわたっていた。

(1) 免許や資格

免許や資格(図6)は、約7割の者が「ある」と回答していた。その内容は、普通免許、自動二輪、無線、簿記、英検、情報処理技術者、危険物取扱、販売、教員、理容師、ゴルフ指導員、鍼灸師などであった。仕事の内容に関連しているものが多かった。

(2) 入退学について

(a) 入学の理由

入学の理由について、回答の自由記述をもとに以下の7カテゴリーに分類した。

☆「専門領域を学ぶため」：経済学に興味があった、経済学を学びたかったなど。

☆「就職に有利」：学歴がほしかった、経済学部だと就職がよいなど。

☆「大学生活への憧れ」：大学生活に伴う一人暮らしや自由への憧れによるもの。

☆「地理的・経済的理由」：地元の大学だから、自宅から通学できる、授業料が安い、家庭の経済状態を考慮して、など。

☆「学力に応じて」：自分の学力相応だったからというもの。

☆「漠然と・特に理由なし」：なんとなく、周りの皆が行くから、なりたいたい職がはっきりと決まっていなかったから、など。

☆「志望校に不合格」：別に志望校があったが、不合格だったためというもの。

その結果(図7)、「地理的・経済的理由」、および「漠然と・特に理由

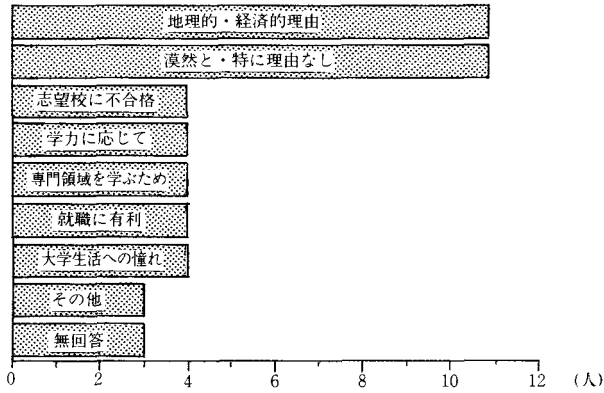


図7 入学の理由（複数回答）述べ数計48名

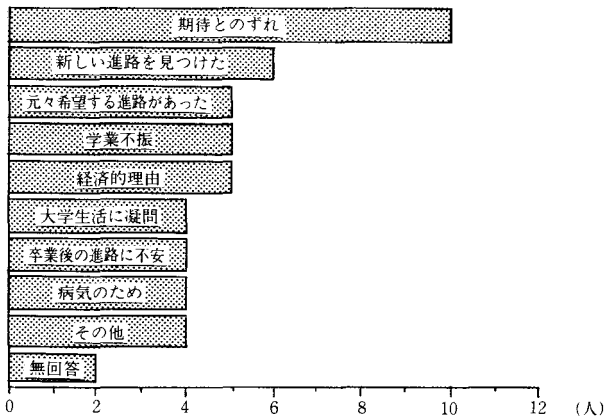


図8 中退の理由（複数回答）述べ数計49名

なし」が最も多く、ともに全体の23%を(述べ11名)を占めていた。その次に多かったのは、「志望校に不合格だったから」、「学力に応じて」、「専門領域を学ぶため」、「就職に有利だから」、「大学生活への憧れ」がそれぞれ約8% (述べ4名)であった。

これら7つのカテゴリーのうち、「専門領域を学ぶため」という理由は、はっきりした目的意識や価値観にもとづいて大学を意味づけたものといえる。また、「専門領域を学ぶため」という理由ほどではないにしろ、「就職に有利」、「大学生活への憧れ」という理由も、どちらかといえば積極的な意味づけによるものといえるだろう。それに対して、「漠然と・特に理由なし」、「志望校に不合格」といった理由は、大学進学そのものが、あるいは入学した大学が自ら選び取ったものではなく、受け身的、消極的な理由によるものと考えられる。さらに「地理的・経済的理由」、「学力に応じて」というのは、内的な動機よりも現実面を優先させた理由である。そこで、7つのカテゴリーを「積極的理由による入学」(専門領域を学ぶため、就職に有利、大学生活への憧れ)、「消極的理由による入学」(漠然と・特に理由なし、志望校に不合格)、「現実的理由による入学」(地理的・経済的理由、学力に応じて)の3つに分類してみた。その結果、「消極的理由による入学」と「現実的理由による入学」がともに全体のおよそ3分の1(述べ15名)を占め、「積極的理由による入学」は全体の4分の1(述べ12名)にすぎなかった。

以上の結果から、回答者の多くは、大学を自らの目的意識に沿って積極的に選択したというよりも、明確な目的意識をもたないまま、あるいは現実的な理由によって入学しているということがわかった。これは、調査した本学が特殊な専門学部をもった大学とは違い、比較的一般性の高い経済学系の大学であること、また偏差値や近隣他大学との関係で第一志望校とならない場合が多いといった、本学の特性もある程度影響していると思われる。

(b) 中退の理由

中退の理由について、回答の自由記述をもとに以下の8カテゴリーに分類した。

- ☆「新しい進路を見つけた」：決まっていなかった進路をはっきりと決めたというものや、それまで考えていた進路を変更したというもの。
- ☆「元々希望する進路があった」：元々の希望の大学や進路に再挑戦するというもの。
- ☆「学業不振」：単位取得不足による進級や卒業の延期，単位が取れず卒業する自信がないなど。
- ☆「経済的理由」：家庭の事情などで経済的に負担というもの。
- ☆「病気のため」：病気療養のため，通学が継続できなくなったというものの。
- ☆「期待とのずれ」：大学の雰囲気や講義が期待と違っており，落胆したというもの。
- ☆「大学生活に疑問」：学歴や勉強は自分に必要ないと考えた，大学では無駄な時間を過ごしてしまいそうだったなど，大学生活への疑問が生じたことによる。
- ☆「卒業後の進路に不安」：卒業後の就職ができるかどうか不安を感じたというもの。

その結果（図8）、「期待とのずれ」が最も多く、全体の2割（述べ10名）を占めていた。次に多かったのが「新しい進路を見つけた」、続いて「元々希望する進路があった」、「学業不振」、「経済的理由」がこれに続き、さらに「大学生活に疑問」、「卒業後の進路に不安を感じた」、「病気のため」という理由であった。

これら8つのカテゴリーのうち、「新しい進路を見つけた」、「元々希望する進路があった」というのは、アイデンティティ達成に向けた、目的意識の明確な自主的な中退といえる。「期待とのずれ」、「大学生活に疑問」、「卒業後の進路に不安」というのは、大学生活に対する違和感や不満、不安がもとでの中退である。また、「経済的理由」、「病気」というのは、外

的な事情によりやむを得ず中退せざるを得ないというものである。「学業不振」に関しては、能力や適性のなさによることもあろうが、上記のようなさまざまな理由により、目標や帰属意識を失った結果、派生する問題でもあろう。そこで、8つの理由を「アイデンティティ達成のための中退」(新しい進路を見つけた、元々希望する進路があった)、「違和感による中退」(期待とのずれ、大学生活に疑問、卒業後の進路に不安)、「外的理由による中退」(経済的理由、病気)、「学業不振」の4つにまとめてみた。その結果、「違和感による中退」が約4割(述べ18名)で最も多く、続いて「アイデンティティ達成のための中退」が約2割(述べ11名)、「外的理由による中退」が2割弱(述べ9名)、「学業不振」が約1割(5名)という結果になった。

中退の理由の中で、大学に対する「違和感による中退」が最も多くを占めていたことの意味は大きいと考えられる。この結果は、高学歴社会に伴う学生の多様化の反映とみることもできるであろうが、それだけでは不十分であろう。なぜなら、もし、大学が学生の期待どおりの大学であったなら、彼らは中退せずにすんだ可能性も考えられるからである。この点については、大学が今後取り組むべき課題を提供するものとして重要であろう。一方、かつては多くを占めていたと思われるが、現在は減少していると予想された「外的な理由による中退」は、やはり少なかった。反対に、「アイデンティティ達成のための中退」がみられたことは、明確な目的意識をもちアイデンティティ形成に積極的に取り組もうとする姿勢によるものであり、頼もしさを感じさせるものである。これら「外的理由による中退」と「アイデンティティ達成のための中退」は、大学の対策によって減少させることは困難であると考えられる。

(3) 将来の展望

将来の目標、希望について、自由記述をもとに「展望あり」、「展望なし」に分類したところ(図9)、3分の2の者(29名)が「展望あり」という

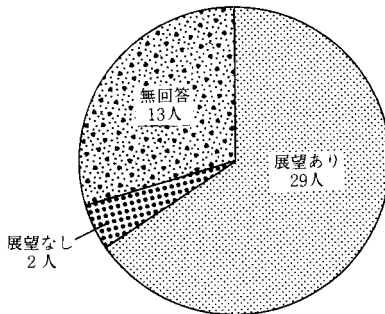


図9 将来の展望

結果になった。内容としては、「仕事をさらに充実発展させたい」、「専門を生かせる職に就きたい」「幸せな家庭を築く」というのが多くを占め、なかには具体的で現実的な目標をもっている者もいた。一方、「展望なし」(2名)、無回答(13名)を合わせた3分の1の者は、明確な展望をもっていないと推測された。将来に対する

明確な展望をもつことができるということは、現在の自己像を肯定的に受けとめており、さらに未来の自己を現在との連続性の中で意識できることを示すものであろうと考えられる。

研究Ⅱ 面接調査

〈方法〉

対象研究Ⅰの質問紙に、後日直接会って詳しく話を伺ってもよいかを尋ねる項目を設け、個別面接への協力を依頼した。その結果面接の承諾が得られたのは15名であった(質問紙回答者44名のうち34%)。このうち連絡が取れ、実際に会うことができたのは8名(44名のうち18%)であった。

面接の方法 以下の質問項目を中心とした半構造化面接を行った。

- (1) 家族、生育歴
- (2) 入学の理由
- (3) 大学生活(対人関係、クラブ、アルバイト)
- (4) 中退の理由
- (5) 退学後の進路(たどった進路、他に希望した進路、進路選択の理由)
- (6) 現在の職業(仕事内容、満足感)

- (7) 現在の生活 (生活形態, 生活費, 趣味, 対人関係)
- (8) 退学を振り返って (良かった点, 悪かった点, どのような意味があったか)
- (9) 将来の展望 (職業選択や発展, 配偶者選択)

〈事例の結果と小考察〉

8名の事例(事例A, B, C, D, E, F, G, Hとする)について, 面接の内容を以下にまとめた。

事例A : 22才女性, 1年生の終わりに中退, 2年半経過。

家族は, 父, 母, 祖父, 姉, 本人の5人家族。小, 中学校は成績はよかった。高校は進学校で, 周囲は真面目に勉強していたが, 自分は結構遊んでいた。理系クラスで男子が多かったが, 慣れるとそれが当たり前になり, 皆と友達になった。

もともと理系で工学部を志望していたが, 志望校は不合格だった。親は浪人してもいいと言ったが, ブランクを空けたくなかったし, 一人暮らしもしたかったので入学した。

大学の生活は, 試験前はまじめに勉強し, 押えるべき単位は取った。クラブは運動部のマネージャーをしていた。クラブやクラスで友人ができ, 今でも連絡を取っている。

中退したのは, 自分の進みたい道が諦められなかったから。第1志望の国立大学は不合格だったが, 現在在学中の国立大学の追加募集に運よく合格した。一人暮らし。仕送りとアルバイトでまかなっている。

現在の大学のよいところは, 好きな理系の勉強ができることと, 小人数制であることで, 満足している。ただ, のびのびとした私立大学に比べ堅苦しいところはある。現在の大学でも運動部のマネージャーをしている。休みには居酒屋などのアルバイトをしている。

退学時を振り返って, 女子であっても一生の間に1, 2年の寄り道があ

ってもいいのではないかと思う。周囲も賛成してくれたので、迷いはなかった。

将来は、今の勉強を生かせる職業に就きたい。最初は企業の研究室を考えていたが、大学院進学が必要らしい。それも考えたが大変そうなので、今は国家公務員の専門職に就きたいと考えている。結婚はまだ考えていない。結婚しても仕事は続けたい。

・考察

中退までの大学生活は、友人も多く、適応はよかった。退学は、もともと希望した進路があったため、初志を貫徹しようとしての主体的な選択であった。その結果、第1志望の大学には進めなかったが、やりたかった理系の勉強ができることにやり甲斐を感じている。現在の大学生活への適応もよく、大学生らしい健康的な生活を送っている様子である。退学したことにより、自分の望む方向性を取り戻すことができたといえよう。

事例B：20才男性，1年生の途中で中退，2年経過。

祖母，父，母，本人，妹2人の6人家族。

もともと英語に関心があったが，受験した大学は経済学部のみ。学力に応じた4校を受験し，3校合格。最も実家に近い本学を選んだ。

入学後，何人か友人もできたが，やはり英語をやりたくなかった。英語自体が好きなのと，将来のことを考えて。講義には最初は真面目に出ていたが，再受験を考え始めた6，7月からあまり出なくなった。夏休みに両親に相談したら，驚いていたが，「中途半端に休学するよりはっきりさせた方がいい」と言われ，中退した。半年の自宅浪人生活。正月頃は辛かった。「何でやめたのだろうか」と思ったこともあった。けれどどうにか続けてやれた。翌年，遠方の都市にある現在の大学英文科に入学した。一人暮らしで，親から仕送りをしてもらっている。

現在の大学は満足とはいえない。第1志望ではないので，多少コンプレックスを感じている。英語を使う機会は確かに増えたが，教官の発音がよ

くない。実践よりもアカデミックな感じ。専門学校にも通っているが、こちらの授業スタイルの方がいい。やらなければと思い、やる気になっている。

退学して悪かったことは、友人と離れなければならなかったこと。当時は最良の選択をしたつもりだったが、もう少し柔軟に考えてもよかったと思う。退学せず、英語を学ぶ方法もあったと思う。これからは、退学してよかったと思えるように頑張りたい。

留学試験の勉強中。アメリカの大学に正規留学したい。将来は外資系会社など、知識を行かせる仕事に就きたい。

・考察

もともと希望した英語の勉強が諦められずに、選んだ中退であった。第1志望の大学は逃したため、必ずしも満足ではないが、英語の勉強には積極的に取り組んでいる。退学については、もう少し柔軟でもよかったという気持ちも少しあるが、後悔とならないようにするために、一層努力しようという姿勢が感じられる。将来展望もある。

事例C：25才男性，2年生の終わりに中退，3年半経過。

父，母，本人，弟2人の5人家族。高校ではバンドをやっていた。成績は普通だった。

大学は，地元であること，とりあえず経済学系だと就職に有利と思って選んだ。一浪。他にも4校受験し，本学のみ合格。

入学後，OLと同棲し，そことアルバイトとの往復の生活だった。次第に大学から足が遠のいていき，単位もあまり取れなかった。あるとき，たまたま中学の先生に会って話をし，子供のキャンプに連れて行ってもらった。そこで今まで知らなかった自分を発見し，教員になりたいと強く思った。2種免許なら短大で取れるので，再受験することにした。大学には友人もおり，不満があったわけではなかった。親は惜しがった。

退学後，短大に入学。卒業後，塾の講師をするが，自分の学歴や教え方

を批判され、2カ月で退職した。営業職に就くが、仕事がきつく体調を崩す。教授試験に不合格となり、現在はレンタルビデオ店に勤めている。両親と同居。経済的には自立している。恋人は今はいない。友人は多い方。趣味はバンド活動。現在の仕事は楽で経済的にも問題ないが、やり甲斐がない。やはり小学校教員になりたい。子供と触れ合う機会がないので、ブランクが怖い。

退学してよかったことは、教員免許を取得できたこと、悪かったことは学歴が短大卒になったこと。将来は、人間として信頼される教員になりたい。結婚はまだできる立場ではない。自分のことで精一杯という感じ。

・考察

入学後、中学の恩師と出会ったのをきっかけに新たにやりたい進路をみつけ、進路を変更した。積極的な中退といえる。しかし、採用試験に受からず、希望はまだ実現していない。仕事を転々とするところには、やや忍耐力の弱さも感じられる。

事例D：22才男性，2年生の終わりに中退，1年半経過。

祖母，父，母，本人，弟の5人家族。

大学は，自分の学力から選んだ。3校受験し，2校合格。

大学では，喫茶店や焼肉屋，ショットバーのアルバイトに専念し，大学にはほとんど行かなかった。単位は0。大学にも大学外にも友人はいた。

2年の夏，警察に勤めている叔父に，「ぶらぶらしていて就職ができるのか。今のうちに心を入れ換えないか」と警察官になることを勧められ，試験を受け，合格した。

現在の仕事は，体力勝負，不規則な時間と予測できない内容など，大変だったが，次第に慣れてわかってきた。充実した仕事だと思う。両親と同居で生活費は自分でまかなっている。趣味は車。友人は多い。女性とも何人かとつきあっている。

退学したことは体裁が悪かったが，大学に残ったとしても就職できた

ろうかと思う。大学にいる頃は、何の目標もなくグータラしていた。今はめり張りのある人間になったと思う。また、家族と過ごす時間が増え、関係がよくなった。将来は、まだ漠然としてわからない。30才まではがむしやりに何でもやりたい。仕事はきっちりとし、遊ぶときはむちゃくちゃするような「大人の不良」になりたい。

・考察

学力に応じ大学に入ったものの、目標がないままに過ごしていたところ、叔父の勧めで中退し就職した。現在の仕事には充実感を感じ、熱心に取り組んでいる様子である。家族との関係も親密さが増している。

事例E：25才男性，4年生の終わりに中退，2年半経過。

祖父，祖母，父，母，本人，妹の6人家族。

大学の選択理由は、自宅から通学できることと、高校のときから社会が得意で経済学に興味をもっていたから。

大学は、一般教養はおもしろかったが、専門になるとつまらなくなった。講義に関係なく大学には毎日通学した。文科系の2つのサークルに入っていて、友人と話すのが楽しかった。学外も含め、いろんな人と知り合えた。今でもつき合いはある。1年のときからガソリンスタンドのバイトを始め4年間続けた。単位不足のため、3年生に進級できず、留年。バイトの上司に勧められ、退学してバイト先に就職することにした。待遇は大卒扱い。現在は家族と同居。経済的には自立している。今年から主任。仕事は自分に向いていると思うし、満足している。正社員になって売上げを気にするようになった。管理職になるように上から言われている。評価されている分、期待に応えないといけないのが厳しい。大学に行ったことに後悔はない。考えたり遊んだりする余裕があったし、バイトを経験していたお陰で、仕事の飲み込みが早かった。退学してよかったことは、早く社会人としてのスタートができたこと、悪かったことは友人との連絡がつけづらいこと。将来の目標は、実績を上げ、部下の育成をしていくこと。取りあえ

ず店長になること。2, 3年後に結婚を予定している。

• 考察

経済学を学ぶために大学に進むが、実際はむしろサークルやバイトに専念する生活だったようである。そして単位不足のために卒業延期となるが、卒業まで待たずに就職することを主体的に選択した。バイト先に就職することで、学生生活との連続性ももてた上、早く社会人になることもできた。その結果、入学や退学は肯定的に評価されている。現在の適応感も高い。仕事や結婚についての展望ももっている。

事例 F : 23才男性, 2年生の途中で中退, 4年経過。

家族は、父、母、本人の3人家族。父親は厳しい人で、よく職場で喧嘩をして転職を繰り返した。小、中学校は優等生だった。高校では皆が行くから大学に行こうとは思っていたが、大学で勉強したいものがなく、あまり勉強しなくなり、成績は低下していった。

3大学を受験し本学のみ合格。地理的理由、学力で選んだが、第1志望ではなかった。大学が下宿からやや遠いこと、朝の新聞配達バイト後寝てしまうこと、授業に興味をそそられるものがなく面白くないことなどで、夏頃から行かなくなった。親や友人には反対されたが、中退することにした。バイトは、休暇をもらえなかったことがきっかけで辞めた。友人は少なかった。

その後、デザイン、洗車、警備、郵便局、工場、風俗業、調査などのバイトを転々とし、カラオケボックスでは正社員になるが、経営者と合わず、辞めた。いろいろな仕事をする中で自分の向き、不向きがわかってきた。客に頭を下げるのは向いていないなど。一人っ子なのでいつかは実家に帰るとは思うが、2, 3日帰るだけで親がうっとおしくなるので今は一緒に住みたくない。

現在は、美術関係の製造業の常勤として1年働いている。手先を使うのは自分に合っていると思うが、流れ作業のようなところや、休日の少ない

のが不満で辞めたいと思うこともある。ずっと一人暮らし。経済的には自立している。趣味はボクシング、オートバイ、バイクやヘルメットの塗装。

退学を振り返って、親に迷惑を掛けたと思う。将来は、好きなことを好きにだけしたい。結婚はまだ考えていない。

• 考察

もともと、大学進学に対する目的意識がはっきりしなかったのと、入学後大学に魅力を感じなかったことから、次第に遠ざかっていくことになったようである。その後、いろいろなことに次々と挑戦するが、不満や違和感を感じると簡単に辞めてしまうというパターンが伺える。これは父親ともよく似ている。今の仕事も必ずしも一生の仕事であるとは考えていない様子であり、今後も同じことを繰り返す可能性があろう。父親との葛藤も未解決なようである。

事例G：23才男性，3年生の終わりに中退，2年半経過。

父，母，姉，本人の4人家族。父は農地開発の仕事。中3のときに死去。仕事と生活を分けているところは尊敬できたが，厳しいところも教えてもらいたかった。母は事務職。姉は精神障害のため，社会生活が困難。

大学は「自由で遊べる」というイメージがあった。他にも2校受験し，本学のみ合格。しかし，イメージと違い，大学生活は甘くなかった。単位不足で3年生に進級できず留年。それでもやる気がなく，大学に行かなかった。ずっと電器店のバイトをしていて，勉強よりもお金の方に関心があった。卒業する自信がなかったので，中退した。母は猛反対した。今思えば大卒の資格だけでもと思うが，自分で決めたことなので後悔はしていない。連絡を取り合う友人は1人くらい。

退学後，工場，土木業などの期間労働の仕事をする。数カ月間働き，お金が溜まると働くのが馬鹿馬鹿しくなり，辞めて遊ぶというのを繰り返した。現在は建設現場の仕事を始めたが，きついので辞めようと思っている。仕事は給料のよさだけで選んできた。一人暮らしで生活費は自分でまかな

っている。趣味は釣り。

退学してよかったことは、中卒で働き苦労している人もいるなど、世の中を少し広く見れるようになったこと、悪かったことは、甘えが効かなくなり、現実が押し寄せてきて夢や希望がもてなくなったこと。普通に生きて行くことの難しさを知った。自分は何もわかっていなかった。最近はこの様な生き方をしても仕方がないと思うようになった。定職に就いて自分を固めたい。給料よりも職種で仕事を選びたい。結婚はしないといけないのか。家を継ぐなどのことは全然考えていない。

・考察

「遊ぶ」ために大学に進学し、お金稼ぎに夢中になり、結局学業不振のため中退。退学後の仕事の選択の仕方や持続性のなさなどは、それまでのスタイルと変わっていないようである。最近になって自分の甘さを反省し、生き方を変えようとしつつある。しかし、将来展望はあいまいで拡散的である。

事例H：27才男性，3年生の途中で中退，7年経過。

父，母，本人の3人家族だったが，父は小さい頃に死去。母は苦勞を表に見せない人。小，中学校ではリーダー的存在だった。商業高校に進み，陸上部に所属していた。

大学の選択理由は，もっと専門の勉強がしたかったから。また，家の経済状態を考えて自宅から通学できる本学を選んだ。

大学では運動部に入り，和気あいあいとやっていた。

中退の理由は，母の体調が悪くなり，家庭の経済状態が悪化したことと，ゼミの教官のやり方に反発を感じたから。親戚は母を楽にさせた方がいいと言い，小学校の恩師は卒業まで頑張れと言った。友人にはあまり話さなかった。

さまざまな悩みや事態が起こり，とても勉強どころではなかったので，退学したときは解放感があった。しかし，勉学を途中で投げた後悔が今で

もある。クラブの仲間と会えなくなったのもつらかった。今思えば人生の転機だったと思う。

退学後、バイト先だった現在の鉄道の下請け会社に就職した。本当はデザインや商品開発がやりたかった。納得して就職したわけではなく、満足はしていない。年配の上司が退職したため、今年から経理を任されるようになった。やり方次第でいろいろやっていける。現在の社員は若い者が多いので意見は合う。バイト先で知り合った女性と2年前に結婚して独立。現在は子供が1人いる。家に帰らないと落ち着かず、子供とよく遊ぶ。趣味はドライブ。将来は、今の会社を大きくさせたい。日本各地をキャンプして回りたい。後悔のない人生選択をしたい。

・考察

専門の勉強を深めようとしての大学進学であったが、経済状態とゼミ教官とのトラブルのため、やむなく中退した。やりたかった進路に進めなかったという後悔が残っているが、現在の仕事にはそれなりにやり甲斐を感じて、主体的に取り組んでいる。家族も大切にしている様子である。

〈考 察〉

1. 社会的適応

面接調査を行った全員が、学生の身分または何らかの職業に就き、社会的役割をもっていた。仕事に就いている6名のうち、5名は常勤であり、非常勤である事例Gも、経済的には自立していた。社会的な適応を、現時点での社会的役割や経済的自立という表面的な観点からみれば、8名全員が適応した状態にあるといえるかもしれない。ただ、事例C、F、Gは今までに仕事を次々に変えてきており、現在の仕事も続ける意志はなく一時的なものにとらえている。こうしてみると真に社会的適応を果たしているといえるのは事例A、B、D、E、Hの5名ということになるだろう。

2. 心理的適応

現在の仕事や学校に満足しているのは、事例A, D, Eの3名であった。不満はあるが、前向きに取り組もうという姿勢が伺えるのは事例B, Hであった。事例Cは、まだ目指している小学校教員になることができていないという事情による。一方、事例F, Gは現状に不満を感じているだけでなく、将来の目標意識も漠然としており、かなり不安定な状態にあると考えられる。アイデンティティの達成という視点では、学生的事例A, Bは「達成中」、事例Cは「達成への努力中」、事例D, E, Hは「達成」、事例F, Gは「拡散」の状態にあるといえるだろう。

3. アイデンティティ形成の過程

8名の事例のアイデンティティの形成過程を検討した結果、どのような理由で中退に至るかによって、次の4つの型に分類が可能であると考えられた。それは、Ⅰ「アイデンティティ固執型」、Ⅱ「アイデンティティ変更型」、Ⅲ「ドロップアウト型」、Ⅳ「外的理由型」である。それぞれの型にあてはまる事例とアイデンティティの形成過程を表3に示した。以下に、各々の型のアイデンティティの危機、再編成の過程、アイデンティティ達成の程度、中退の意味づけ、将来展望などについて検討する。

Ⅰ「アイデンティティ固執型」は元々希望する進路があったというものである。事例Aは工学部を志望し、事例Bは英語に関心があったが、志望校に不合格であったり、経済学部しか受験しなかったための不本意入学である。そして、入学後も希望の進路が諦められず、大学を続けることに疑問を感じ危機を体験している。そして、目標を再確認した上で中退を選択している。したがって、この型にとって、中退は「本来の目標に軌道に戻す」ためのものといえよう。再受験の結果、2人とも第1志望の大学ではないものの希望の方向に進むことができ、現在はアイデンティティ達成中である。学業に積極的に関与しており、将来展望も現実的で具体的である。中退を振り返って、事例Aは肯定的に受けとめており、事例Bは両面的であるものの肯定的に意味づけできるように努力している。

表3 事例から見た大学中退者のアイデンティティ形成過程

	I	II	III	IV
型	アイデンティティ固執型	アイデンティティ変更型	ドロップアウト型	外的理由型
事例	A, B	C, D, E	F, G	H
入学	不本意入学 ↓	さまざまな理由 による入学 ↓	目的意識のない 入学 ↓	危機なし
	危機 (疑問) ↓	怠学傾向を伴う 潜在的危機 ↓	危機 (違和感, 不満) ↓	
	目標の再確認 ↓	新たな目標の獲得 (同一化モデルの存在) ↓		
中退	アイデンティティ 達成のための中退 ↓	アイデンティティ 達成のための中退 ↓	違和感による中退 ↓	やむを得ず中退 = 危機 ↓
	達成中 ↓	達成への努力中 (C) ↓	危機の繰り返し ↓	現状のとらえ直しと受け入れ ↓
		アイデンティティ達成 (D, E)	アイデンティティ 拡散	アイデンティティ 達成

II「アイデンティティ変更型」は、入学理由はさまざまであり、なかには事例Eのように経済学を学ぼうとしていた者もあった。しかし、いざ入学してみると、実際はバイトやクラブなどの学業以外のことに専念し、次第に怠学傾向が強くなっていくという点が共通してみられる。表面的には危機を意識せず、毎日の生活を楽しんでいるようにもみえるが、単位が取得できていないために、潜在的には将来の行き詰まりを予感しながらの危機状態にあったと考えられる。事例Dは「何の目標もなくグータラしていた」と当時の自分を評している。こうした状態に転機をもたらしたのが、どの事例も大学外の第三者であったというのが非常に興味深い。事例Cは

中学の恩師、事例Dは叔父、事例Eはバイト先の上司から示唆を受けて新たな目標を獲得し、いともあっさりと中退を選択している。こうした動きからも、彼らが大学生活に物足りなさや不全感を感じていたことがわかる。この型にとって中退は、「新しくアイデンティティを作り変える」ための選択であるといえるだろう。その後、事例Cはまだ目標が実現できていないためにアイデンティティ達成への努力中であり、中退の意味づけは両価的であるが、事例D、Eはすでに達成しており、中退は肯定的に評価されている。

Ⅲ「ドロップアウト型」は、社会的枠組から脱落する傾向をもつタイプである。事例F、Gがこれにあてはまる。彼らはこれという明確な目的意識をもたずに大学に進学している。そして大学の講義などに不満や違和感を感じ、危機を体験する。しかし大学生活の意義を見いだせないままやる気をなくしていき、次第に大学から離れていく。この型にとって中退は「興味の向かないものから遠ざかる」ためのものだといえよう。中退後、彼らは仕事に就いても、やはり不満や違和感を感じやすく、対象の価値を切り下げて仕事を辞めるといったパターンを繰り返しており、同じ危機の連続である。とくに事例Gは「生きていくことの難しさ」を強く感じており、心理的危機は深刻である。中退の意味づけは、2人ともどちらかと言えば否定的である。現在アイデンティティは拡散しており、将来展望も漠然としている。このタイプの者が今後どのようにアイデンティティを確立していくのか関心がもたれるところである。

Ⅳ「外的理由型」は、あるときに不可避的な事態が生じ、中退せざるを得ないというタイプであり、事例Hがこれにあてはまる。事例Hは母親の病気に伴う経済的な理由であった。この他に、本人の病気や事故による怪我などもこのタイプに含まれるであろう。事例Hの場合は、それまでは適応的な大学生活を送って来ており、危機はなかった。中退せざるを得ない事態に遭遇して初めて危機に陥っている。この型にとっては中退は「アイデンティティ危機を引き起こす」ものといえる。この事例の場合、中退の

ために希望の仕事に就くことができず、現状には満足していない。しかし、与えられた現状の中で積極的に仕事に取り組み、次第にやり甲斐を感じるようになってきている。そこでは現状のとらえ直しと受け容れが行われたといえるだろう。現在アイデンティティは達成されており、将来展望ももっている。ただ、中退の意味づけは未だに後悔を伴っており、否定的である。

以上、アイデンティティ形成過程を4つにわけて考察したが、4つの型の違いは、中退がどのような理由によるものかによるものであり、中退の理由によってアイデンティティ危機のあり方や再編成のプロセスが違ってくることが見いだされた。

4. アイデンティティ形成に関わる要因

事例をもとに、中退者のアイデンティティの形成に関連していると考えられる要因について、考察を試みる。

1) 中退時の目的意識

中退の理由がⅠ型、Ⅱ型のように、アイデンティティ達成のための主体的な選択によるものであれば、アイデンティティ達成の過程は順調に進展しやすいといえるだろう。反対に、Ⅲ型、Ⅳ型のように違和感や外的理由などによる消極的な中退の場合は、その後のアイデンティティ形成は困難になりやすいと思われる。本調査では、Ⅳ型の事例Hは現状に積極的に関わることによってアイデンティティを達成しているが、後悔も続いているようである。一般的には、どちらかといえばⅣ型も危機状態が持続することが多いのではないかと推測される。このように、中退の際に目的意識を伴っているか否かということが、その後のアイデンティティ形成に影響してすると考えられる。

2) 友人関係

大学生活の友人関係をみると、Ⅰ型、Ⅱ型、Ⅳ型の事例は概しての交友関係が活発で、交流を楽しんでいた。それに対し、Ⅲ型の事例は友人関係

が貧困であった。このことから、豊かな友人関係を築ける者は、アイデンティティも進展しやすいと考えられる。対人関係を作る力は、心理的・社会的適応と深い関係があることはいうまでもない。調査結果からは表面に現れてはいないものの、Ⅲ型の事例のアイデンティティ形成の難しさは、さまざまな場面での対人関係の葛藤や不適応感も影響しているのではないだろうか。

3) 同一化の対象の獲得

Ⅲ型の事例は明確な目的意識をもたずに入学しており、また、Ⅱ型の事例は入学後に目的意識が不明確になっている。このように、この2つの型には入学後の状態において共通点がみられる。すでに述べたように、Ⅱ型の場合は、年長の男性モデルと出会うことにより、その価値観を取り入れ、アイデンティティを獲得していることが注目される。一方、Ⅲ型の方はそうした同一化の対象が得られていない。その後の2つの型のアイデンティティの達成の度合が大きく異なっているのを見ると、理想の同一化の対象を獲得できるか否かがアイデンティティ達成の重要な要因であると考えられる。Ⅲ型の事例Fの、気にいらないと簡単に辞めてしまうところは父親にもみられるものであり、父親が理想的なモデルとして機能していないと考えられる。また、事例Gは父親に敵しさが足りず、また本人の思春期に死去したことから、やはりモデルの欠如の状態にある。ちなみに、Ⅳ型の事例Hも早期に父親を亡くしている。そして中退のもうひとつの理由に教官とのトラブルがあったこと、また上司の退職を機に仕事に積極的になっている様子も伺えることから、権威的存在に対する葛藤が中退やアイデンティティ達成に関係していたという見方も可能と思われる。Hirsch & Keniston (1970) は、大学中退者の心理特性として、父親に対する同一化における強い葛藤、困難な状況から回避する傾向などを挙げている。こうした特徴は本研究のⅢ型に典型的であるといえるだろう。

〈総合考察〉

中退した学生のその後の様子については、これまで特別な機会がない限り知ることはできなかった。本研究ではその一端を明らかにすることができた。

質問紙調査を行った研究 I では、ひとくちに中退といっても、さまざまな中退のあり方があることがわかった。また、中退後の適応は比較的良好ということもわかった。彼らの回答内容からは、現在の生活に積極的に取り組み、楽しんでいる様子が伺われた。このような結果は、われわれをほっとさせるものである。しかし、仕事に就いていても不適応感を感じていたり、一部には社会的な役割をもたないままの者がいることも事実である。個別面接からは、質問紙だけではとらえることのできない内面について知ることができた。その結果、一見社会適応ができていかにみえる者であっても、心理的には未解決な課題をもっている場合もあることが明らかになった。さらに、彼らのたどる道筋はひとりひとり違うものであるが、アイデンティティの形成の観点からは、いくつかのタイプに分けられることがわかった。そして、どのタイプであっても、中退の前後には心理的危機の体験を伴っているということが明らかになった。また、アイデンティティ形成には、退学時の目的意識、友人関係、同一化の対象の獲得という要因が深く関係していると考えられた。これらの要因を総括すると、中退を巡るアイデンティティの達成には、目的意識とそれを支える人間関係が大切であるといえそうである。

また、本研究の結果は大学側が取り組むべき対策という点からも、いくつかの課題を提供していると考えられる。質問紙調査では、違和感によって中退した学生の意見から、興味や関心もてるような講義づくりをはじめとした大学の魅力づくりが大切であるといえるだろうし、また、個別面接調査からは、目的意識を入学早期からもたせるためのカリキュラムの工夫、友人作りの場の提供、先輩や教官が同一化のモデルとなるような積極

的なかわり、ドロップアウト型の学生の発見のためのネットワークづくり、学生相談機能の充実などの対策が考えられるであろう。中退者の声に謙虚に耳を傾けることで、今後中退者を減少させることも不可能ではないであろうし、それが大学の責任でもあろう。

〈今後の課題〉

本研究の調査結果は、あくまで質問紙や面接への協力を得ることのできた中退者の結果である。したがって、大学中退者の全体像を示すものではない。調査に協力したのは、どちらかといえば適応感が高く、心理的に余裕のある人達であろう。協力が得られなかった人達の中には、さまざまな葛藤や深刻な問題を抱えている者が多くいるのではないかと推測される。なかでも、精神障害は大きな問題であろうと考えられる。また、面接調査で見いだされたアイデンティティの形成過程のモデルや要因については、引き続き事例を増やしていき、さらに検討を重ねていく必要があると考えられる。

〈要約〉

本研究は、大学を中退した学生その後の生活、社会的適応、心理的適応の状態を明らかにし、アイデンティティ形成の過程を検討した。研究Ⅰでは質問紙調査を、研究Ⅱでは面接調査を行った。質問紙調査では44名、面接調査では8名の被調査者を得た。その結果、研究Ⅰでは、ほとんどの者が学生や仕事などの社会的役割を得て活動していた。また、3分の2の者は満足感を感じていることがわかった。大学入学の理由は、明確な目的意識をもたずに、あるいは現実的な理由によるものが多くを占めていた。退学の理由は非常にさまざまであったが、なかでも期待とのずれなどの大学に対する違和感によるものが最も多く、やむを得ない外的理由によるものや、アイデンティティ達成のための自主的な退学もあった。研究Ⅱでは、中退者のアイデンティティの形成の過程は、主に中退の理由によって4つ

の型に分けられることがわかった。それは、I「アイデンティティ固執型」、II「アイデンティティ変更型」、III「ドロップアウト型」、IV「外的理由型」というものであった。それぞれの型の心理的プロセスについて検討を行った。その結果、大学中退者のアイデンティティの形成には、退学時の目的意識、友人関係、同一化の対象の獲得という要因が関係していると考えられた。

〈付 記〉

本研究は文部省科学研究一般研究（B）の助成金を得て行ったものである。本研究の調査の実施にあたり、快くご協力いただいた学生部の方々に深謝いたします。

引用文献

- Hirsch, S. J & Keniston, K. 1970 Psychological issues in talented college dropouts. *Psychiatry*, 33, 1-20.
- Stuhr, C. 1987 *Fear and Guilt in Adult Education: A Personal Account of Investigations into Students Dropping Out*. Saskatchewan: A CHCC Research Service Publication.
- Timmons, F. R. 1978 Freshman withdrawal from college: a positive step toward identity formation? A follow-up study. *Journal of Youth and Adolescence*, 7, 159-173.